

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『倫（みち）』

大通りと交わる交差点の中には、道幅が5mもないのに信号機がある場合があります。皆さんはそんな信号機が「赤」のとき、車も人も通っていない場合“えいっ！”と渡ってしまうことはありませんか。私はバイクや自動車を運転している時には絶対にしませんが、自転車や徒歩の場合にはやってしまったことがあります。

先日の通勤途中のことです。スマホに目を落とし信号待ちをしている高校生風の女性が目に留まりました。私も同じ交差点で信号待ちをしていたのでよく見ると、口紅をつけて化粧をしています。カールした長い睫毛にマスカラもつけているのでしょう、目元が妙に派手でした。スウェットをはいてスニーカー姿でしたが、よく見るとスウェットに重ねて短いスカートも履いています。どうやら学校へと向かうようでした。

私が違和感をもったのは、この子が信号を守っていることでした。信号が青になり、私のバイクも動き出したタイミングでその子も歩き出し、『やっぱり信号待ちしてたんや！』と分かるにつけ、風貌で行動を判断したことを深く反省した出来事でした。

新年早々のエッセイには相応しくない内容かもしれませんが、私にとってはここに書きたくなるくらい不思議なことでしたし、自分の中の判断基準が狂っていたことを深く反省させられたことでした。名前も知らない子ですが、判断軸のブレを確認させてもらえたことを感謝すると共に、偏見で見てしまったことをお詫びします。

さて、2026年がスタートしました。みなさん、新年あけましておめでとうございます。今年も、どうぞよろしくお願い致します。

今年の4月にはいよいよ「共学化」と「通信制の設置」へと大きな改革を実行した結果として入学してくる生徒を迎えます。いろいろ不安はありますが、現在の気持ちでは確実に楽しみの方が勝っています。

今日の始業式でも、生徒たちには今年度の最後をきちんと始末することに加えて新年度に向けた心構えを整えることを訴えました。また、併せて大学卒業後の人生の方がずっと長いこと、その人生を正しく生きていってほしいことも伝えました。

私の話の後には中高生合わせて5人が壇上に上がってきて思いや決意を述べました。「いつか話してみたいと思っていて、最後に勇気を出してやれてよかった。」と言った生徒や、お世話になった先生方に感謝の気持ちを伝えた高校3年生の姿もありました。

今回のテーマである「倫」には「人が修め、守るべきみち」という意味があります。人生を正しく生きるということは、この「倫（みち）」を踏み外さないということです。

3学期の始業式に当たり、「正しく生きる」ことの気高さと潔さ、「思い切ってやってみる」ことの大切さとできた時の満足度について考えてみてほしいと思っています。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『寄り添うということ』

もう何年も前から教育の世界では「生徒に寄り添う」という言葉がよく使われるようになっていきます。大学で教師を目指す学生を指導していた頃には、多くの授業で習ってきたのか、学生たちもよくこの言葉を使いました。

私は意地が悪いのか、学生が簡単にこの言葉を使うと、あまりよい気持ちがしませんでした。

『その言葉は、そんなに簡単なことじゃない!』
とってしまうのです。20代から長く勤務した



小児がんの子たちのための募金活動

中学校には、社会的に厳しい状況下に置かれた生徒たちが多く在籍していました。その子に責任の負えないことで差別をされたり、将来的に差別を受けるかもしれない立場にいたりする子たちです。具体的には被差別部落に暮らす生徒や児童養護施設から通う生徒、障害のある生徒や単親家庭に育つ生徒たちのことで、その割合は半数を超えていました。結局はその学校に20年間勤務し続けることになったのですが、生徒の実態が理解できてきた頃ようやく「生徒に寄り添う」ということの意味が分かったように思います。学習に遅れがちな生徒の家に行き、何時間も一緒に勉強する。問題行動を繰り返す生徒たちを連れて夜通し琵琶湖で魚釣りをしたりもする。生徒や保護者に高校進学や大学進学の意味を繰り返し説く。諸行事のたびに夜遅くまで生徒を活躍させる術を生徒会役員や先生方と考える。そんな取組が常態化していました。

今は家庭を顧みないそのような取組はできないでしょうし、それを望むこともありません。しかし、今から40年ほど前の中学校が荒れていた時代には、日本中の多くの教師が同じような教師人生を送っていたと思います。そうして生徒やその保護者との信頼関係を築き、ようやく心の通った指導ができたのです。そして、こうした実践を通して「生徒に寄り添う」ということの意味を実感し理解したのだと思います。

今学期、「生徒に寄り添う」という言葉を何度も思い出すことがありました。もちろん生徒も学校も時代も違います。若い頃に経験した内容と同じように考えることはできませんが、私自身も「生徒に寄り添いきれていない」と思うことがあったのです。

時代が変われば、当然ですが起こる事象の内容も変化します。例えばSNSへの書き込みが発端となるトラブルなど、そもそもSNSが存在しなかった当時にはあり得ないことです。どんな事象でも、私たち教師はその解決のために生徒に寄り添い、丁寧に指導を続ける必要があります。それができないと、問題の解決を遅らせるばかりかトラブルをより大きくしたりもします。そして、このことには昔も今もないのです。

もうすぐ2025年が終わります。そしてすぐに2026年度の大改革の年度を迎えます。このタイミングで、「目の前の生徒を大切にすること」、「生徒に寄り添うこと」について、その具体的な取組まで含めて改めて深く考えてみたいと思っています。

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『2 学期を終えて』

朝晩の寒さが身に堪える季節になりましたが、驚くべきことに、自宅玄関の鉢植えのバラが幾つかの蕾を付けました。さすがに蕾をつけてからそれが大きくなるのに時間がかかってはいるのですが、植物の生命力に驚きと感動をもらっています。

バラの開花時期について調べてみたところ、次のように出ていました。「開花時期は主に春（5～6月）と秋（10～11月）です。品種には“一季咲き”（春）と“四季咲き”（春・夏・秋）とがありますが、冬に咲く「冬薔薇」も存在します。」

これまで冬のこの時期に咲いたことがないので、うちの鉢は「冬薔薇」ではないと思うのですが、どうやら不思議なことが起こっているようですね。

さて本日、長い2学期が終わりました。「暑い、あつい」と連呼していた時期に始まり、いつの間にか「寒いですね」が挨拶代わりになっています。2学期は四季のうち春以外がある実に長い学期なのです。

終業式では、各行事の写真を使って今学期を振り返った後、「出会いを大切に」というテーマで話をしました。生徒数がそれほど多くない本校だからこそ、意識的に「出会いの場」を作っては生徒に経験をさせていると切り出しました。以下は終業式で話した内容です。人と人とは“出会い”によって“触れ合い”が始まる。“触れ合い”から“協力”や“協働”が起こる。それが上手くいくと、自分が周囲の人やその場の役に立っているという“自己有用感”をもつことができる。この気持ちは自尊感情を高め“幸福感”を感じることができる。こういう人が増えることでその人たちの居る社会全体が幸福感で包まれる。伝統文化学習、総合・探求の時間、キャリア学習、部活動、研修・修学旅行（学校交流やホーム・ステイ）などの場面がこれに当たる。これらの場面を利用して“出会い”から“幸福感”を感じられるようになってほしい。

私の話の後には例によって感想や意見や決意を述べに6人の中高生が壇上に上がってきました。研修旅行先での経験を学びに替えたいと決意を述べた人もいました。今回も暖かな終業式にできたと秘かに思っています。

また昨日、冷泉貴実子先生をお迎えして高校1年生たちが和歌の授業を受けました。冷泉家は平安時代から続く旧公家で、貴実子氏は藤原定家の直系でいらっしゃいます。その方から直接和歌の授業をしてもらえる本校生徒は本当に恵まれています。昨日は、1時間の講義と1時間の歌づくりの時間となりました。

初雪 「寒き朝 庭に目をやり 息をのむ 木々の白さに 初雪と知る」 清人
「初雪」をお題に生徒と一緒に作りました。お粗末さまです。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『いざ、Taiwan へ』

1位ーソウル 2位ー台湾 3位ーホノルル
4位ーグアム 5位ープサン これは旅行斡旋業者トラベルコが示す「冬の海外旅行先人気ランキング」のトップ5です。もう一つJTBのHPからも「この年末年始に行きたい海外旅行ランキング」を観てみました。1位ーハワイ 2位ー台湾 3位ーオーストラリア 4位ーグアム・サイパン 5位ー北欧 こちらも台湾が2位に入っています。

因みに、台湾人気の理由は「暖かさ」と「食」だということです。その台湾に明日から高校2年生たちが4泊5日で研修旅行に行きます。

写真は昨年度の九份と十份の様子ですが、台湾と言えば、ここは是非とも訪れたい場所です。九份の幻想的な街並みと十份のランタン飛ばしは、生徒たちにとっても一生忘れられない思い出になるものと思われます。

現在、政治上でも台湾が話題になることが多いですが、研修旅行先として台湾を訪れることについて不安はありません。旅行業者とも、その点については十分に打ち合わせていますので、保護者の皆様方には、どうぞご安心ください。

ともあれ、台湾は複雑な歴史と文化をもっています。オランダや清朝に統治された時代や日本の植民地になっていたこともありました。第2次世界大戦後は中国国内の政治対立からその一方が台湾に移り独自の発展を遂げてきました。日本の植民地になっていたにもかかわらず親日派が多いのは、当時の日本政府の政策によって、教育・衛生・インフラ・経済システムなどをはじめとして台湾が一気に近代化されたことによります。今では、アジア・ニース（NIES 新興工業経済地域）の一員として急速な発展を遂げ、電子機器部門では世界的な生産を誇っています。写真で紹介した“古き良き地域”と最新のテクノロジーを開発・生産する新しさとが混在したとっても魅力的な国です。

また、終戦後の対立の際に中国本土から台湾島へ逃れた蒋介石は、中国の古くからの宝物をすべて持ち出しました。台北にはそれを集めて展示した「故宮博物館」があり、研修旅行でその見学もします。世界史の教科書に載っているような2000年以上も前の実物を観ることができるので、それも楽しみです。明日、いよいよ本校の高校2年生がそちらに行きます。台湾よ、楽しみに本校生たちを迎えてください。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校
澤田 清人

『3連覇』

今年一番の寒波が襲来しているそうで、昨日の朝から真冬並みの寒さです。朝の愛犬の散歩の際には雪が舞ってきてとても驚きました。現在は中学高校共に期末考査中です。風邪などひかないよう十分に注意して勉強を頑張ってください。

さて、11月30日(日)に滋賀県の希望ヶ丘公園において中学校駅伝の近畿大会が行われ、朝から応援に行ってきました。当日は、快晴で暖かく(駅伝には少々暑すぎたかもしれません)絶好の天候に恵まれました。

結果から先に書きますが、なんと見事に優勝。この大会3連覇を果たしました。

私は、タスキの受け渡し場所が見られる競技場の出入り口付近で待機していました。集団になって周回コースへと走って行った第一走者群が先導のバイクに続いて戻ってきました。私の隣に2位の学校の保護者の方がおられた様です。「1位は京都光華やわ。うちはそれに续いてる!」と大きな声で話されました。確かにトップを走るのが本校の選手です。この時は正直に言って鳥肌が立



ちました。このところ調子がよいと聞いていた2年生です。2位の選手がすぐ後ろに迫っています。本校の第2走者は1年生。『大丈夫やろか?』という心配も何のその、見事に2位の選手を引き離して第3走者へとタスキをつなぎました。第3走者が唯一の3年生です。颯爽と飛び出していった彼女も2位との距離をさらに広げました。後から分かったことですが、ここまでの3人のランナーはすべて区間賞を獲得したそうです。1年の第4走者も頑張りました。少し距離は詰められましたが1位を堅持しています。2位の学校のアンカーはエースだそうです。うちの選手に続いて二人が競技場に戻ってきたときにはその差が数秒に縮まっていた。『逃げろっ!』何度心の中でそう叫んだことでしょう。競技場の第3コーナー付近でうちの選手がスパートをかけて少し距離を開けました。『これで行けるか?』そう思ったのも束の間。ゴール直前で彼女がバランスを崩して倒れかけます。一気に2位の選手が追い上げてきます。『逃げろ! がんばれ!』ゴールした時、2位との差はわずか2秒でした。

アンカーのお母様とハイタッチを交わしました。監督やコーチ、応援の方々も含めてみんなで抱んだ3連覇です。3年の選手はこの3連覇のすべてに関わっています。歯を食いしばって頑張る若者の姿を見せてもらいました。みんな、感動をありがとう。

優勝の瞬間と唯一の3年生の胴上げの様子

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『観てから読むか 読んでから観るか』

時間の経つのは速いもので、来週にはもう12月です。

「師走」とはよく言ったもので、期末テストと2学期の成績処理と懇談会の用意、そして終業式に向けての準備など、本当に気ぜわしい時期になってきました。

さて、「読書の秋」ということで、久しぶりに本に関する話をします。私はTVドラマをそれほどみませんが、今一作だけハマっているものがあります。右の写真の小説をドラマ化したもので、日曜日の午後9時からTBS系列で放映されている小説と同名の『ザ・ロイヤルファミリー』です。この枠のドラマにはかねてから人気の作品が多いのも知られています。ざっと上げると、「南極物語」「半沢直樹」

「下町ロケット」「海に眠るダイヤモンド」「VIVANT」

「陸王」「ノーサイドゲーム」「TOKYO MER」「天皇の料

理番」「グランメゾン東京」「ドラゴン桜」「JIN-仁」など、思い出したまま観てきたものを書き出してもきりがありません。それにしてもどれもとても面白かったです。

読書が趣味の一つである私は、評判になった小説はほとんど読みます。また、評判になった小説はほとんどがドラマ化されたり映画化されたりもします。そこで、小説がドラマ化されたTV番組を観ることは多いです。既にお判りかと思いますが、私の場合はほとんどが「読んでから観る」ということになるのですが、今回はドラマ視聴が先になりました。もう習慣になっているからでしょうか、日曜日の9時になるとTBSにチャンネルを合わせます。最初は何気なく観始めたドラマでしたが、これが面白い！ どんどんハマリ、日曜日が楽しみなくらいになりました。競馬が展開の中心というところにも興味を惹かれました。私は競馬をやりませんが、毎回のように競馬場や北海道の牧場の風景が映され、その激しさと美しさにも心を惹きつけられています。

そこで書店へ行って原作を購入し、今、一気に読むのが惜しいくらいの気持ちで少しずつ読み進めています。不思議なことに、TVドラマより先に進んではいけないような気持ちになりつつもあります。原作の方は“私小説”風に主人公の栗栖栄治（くりすえいじ）が実体験を物語るという体裁になっているのでよりリアリティーがあります。

競走馬のことや競馬界のことなど、初めて知ることたくさんありますが、自分が所有する馬で「有馬記念」を取るという壮大な夢に向かって主人公たちがひた走る姿、また、そこに展開される人間ドラマに胸が熱くなります。

生徒の皆さんには来週に期末考査が控えています。今はそのための勉強に頑張ってもらっていますが、それがすめば、読書や映画ドラマ鑑賞にも少し目を向けてみてください。今回紹介した『ザ・ロイヤルファミリー』に興味を持ってくれたら嬉しいです。いつかどこかで、この小説やドラマについて話ができることを楽しみにしています。



小説の表紙を撮影

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『相手の気持ちを考えて』

朝夕の冷え込みが一段と厳しくなってきました。いつの間にか真冬の装束でバイクに跨り通勤しています。また、東北や北海道では1メートルもの積雪があるとかで、日本中が急な冬の訪れに慌てている状況です。

一方で、自宅玄関先の鉢植えのバラがまた幾つかの蕾をつけています。一体、一年に何度花を咲かせるのか、生命力の逞しさに感動するとともにそれらが開花するのを楽しみにしています。開花したあかつきには、この紙面でも報告させて頂こうと思っています。

さて、火曜日ごとに伝統文化の時間があります。各講師の先生方へのごあいさつをかねて、毎週できるだけ授業の様子を観に行くように努めているのですが、今週の茶道と礼法の授業の中で、同じ言葉が繰り返し使われていることに気づきました。

「相手の気持ちを考えて」「相手様に失礼がないように」ということばです。当然、これまでも使われてきたのですが、どういう訳か今週は特に気にとまりました。

伝統文化の学習では、ともすれば“お作法を身につけること”に重きが置かれがちです。しかし、よくよく考えれば、そのお作法とは自分の所作を美しく見せるため、つまり自分の為ではなく、相手に気持ちよく感じて頂くため、相手様に失礼のないように、つまり、相手の気持ちを考えてのことなのだと遅まきながら気づきました。

ところで、本学園では今年度から幼稚園から大学院まで一貫して「SEL 教育」に力を入れています。「SEL 教育」とは“Social and Emotional Learning”の略で、「非認知能力」を養う教育のことです。自己認識、自己管理、社会認識、関係構築、責任ある意思決定の5つの要素を、学校の教育活動全体を通して育むことを目指すもので、数値化しにくいが見えにくい能力の育成です。一方で、この能力を伸ばすことによって、粘り強く他者と協力しながら物事の解決に取り組むことができるようになるということから、社会に出てから大いに役立つとされています。

人と議論したり協力したりしながら何かを生み出すには、相手の立場や考え方を慮る必要があります。そういう意味では伝統文化の学習の際の相手の気持ちを考えて行動するということは「SEL 教育」を進めるうえで大変有効だということになります。

周囲の人と協働しながらよりよい社会を創る人材の輩出が本学園の大きな目標です。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『 1 1 月 』

10月1日は衣替え。10月1日になれば、学校だけでなく銀行やデパートなどの企業では制服が冬バージョンに替わるというのが長い間わが国の習慣でした。

ところが、昨今では10月1日はまだまだ暑く、クールビズで過ごす人が多いように思いますが、どうでしょう。

11月になってようやく上着を羽織って丁度よい気候になり、世間では秋のオシャレを楽しむムードになってきたようです。

今月も約半分が過ぎ、校内でも生徒が冬服で登校しています。中にはダウンジャケットを羽織り、マフラーを巻いてやってくる生徒もいたりして、『一気に冬になっちゃったなあ』と思わせられたりもします。

子どもの頃、3・4・5月が「春」、6・7・8月が「夏」、9・10・11月は「秋」、そして12・1・2月が「冬」と教わりました。長いことそうだと思ってきましたが、温暖化の影響はすさまじく、日本の四季は変わってしまいました。実際には「夏」が5・6・7・8・9月と極端に長くなりました。11月下旬には「冬」の寒さが訪れるということは変わりませんが、その寒さにも昔とは違いがあります。私が子どもの頃のように、京都に雪が降り積もる日は極端に少なくなりました。小学生の頃、プールの水が凍って運動場から大きめの石を投げてそれを割るといったいたずらをしたものですが、もうそんなこともできないでしょう。（そんな子どもも居ませんね…笑…）

11月に入って一気に山肌が色づき始めています。鴨川の兩岸の木々も急に色を変え始めています。各所で木々が慌てて紅葉を始めているようです。先日のエッセイに書いたキンモクセイの木々も漸く黄色の花をつけました。短い秋です。一気に秋の装いをしなければ、植物は種を残すことも葉を付け替えて成長することもできません。

“食欲の秋”、“読書の秋”、“スポーツの秋”、“芸術の秋”、そして“勉強の秋”。

11月は短い「秋」を楽しむ絶好の時です。木の実や果物がおいしいです。各部活動では新人戦が活発に行われてもいます。コンサートや展覧会も各所で開催されていますし、もうすぐ期末考査もやってきます。「秋」の長い夜、澄んだ空気を感じ、虫の音を聞きながら音楽を聴いたり映画やドラマを観たりして過ごすのも素敵ですが、中高生の皆さんには、その時間を読書や勉強に使ってほしいと思います。

おそらくすぐに「寒い、さむいっ!」と言わなければならなくなります。暑くも寒くもないこの時期を有効に使って勉強に励みましょう。特に高校3年生にとっては人生が決まるといってもよいほど大事な時期です。短い「秋」ですが、一年のうちで最も過ごしやすいこの11月を計画的に、そして大切に過ごしてほしいと思っています。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『ド真剣がカッコイイ！』

朝夕の寒さが身に堪えるようになってきました。つい先日まで「暑いっ！」と言っていたのがウソのようです。いつの頃からか、我が国の春と秋は極端に短くなってしまいましたね。

さて、11月4日（火）の午後、伝統文化学習発表会を行いました。コロナ禍の影響からでしょうか、一旦休止していたものを昨年度復活させました。茶道に書道に華道、箏曲に着付けに礼法の発表は、『一体いつ練習していたのか？』と思うくらい工夫が凝らされていました。高校生たち、それも主に3年生が中心となって見事に日ごろの練習の成果を披露しました。

その中でもひととき感心したのが和歌の披講（和歌に節をつけて吟じます）と日本舞踊でした。きっと長い時間をかけて練習に取り組んできたのでしょう。『よくそこまで！』と思える内容で、観衆はみな、舞台上の演技に引き込まれました。

発表会終了後に講評（感想を述べる程度しかできませんでしたが…）をする場面があったので、その際に言ったことを以下に書きます。

1つ目。文化祭や体育祭はどここの学校でも行うけれど、この伝統文化学習発表会は京都光華にしかありません。いや、本校でしかできません。誇りを持ってほしいです。

2つ目。日ごろ、自分が選択している科目には一生懸命取り組んでいます。他の授業がどのようなことをしているか分かりません。それを知る機会になりました。

3つ目。中学生や高校生の時期は、真剣に物事に取り組むことに対して、照れていい加減な気持ちになる部分があるものですが、そういった感情に打ち勝ってド真剣に取り組んでいました。そして、その様子が何とも言えずカッコ良かったです。

4つ目。伝統文化担当の先生方、生徒の力と豊かな気持ちを引き出して頂きありがとうございます。生徒と保護者の方に代わってお礼を言わせてもらいます。

5つ目。保護者の皆様、これが本校の伝統文化学習です。生徒たちは正課の授業として一生懸命に取り組んでいます。自分で着物の帯を締めている発表を観て感嘆の声を上げておられる方もいらっしゃいました。

一生懸命に取り組むことや物事に真剣に向き合うことに対して、照れたり恥ずかしがったりする中高生は少なくないと思います。また、中高生とはそのような年頃でもあります。そのような中で、まじめに一生懸命取り組む本校の生徒を誇らしく、頼もしくも思います。この授業と発表会とは今後も大切に継続していかなければならないと再認識しました。生徒の皆さん、保護者のみなさん、自信を持ってください。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『“Move！”を終えて』

朝の愛犬の散歩道にキンモクセイの木が数本植えられている場所があります。『今日こそは芳香が漂っているかな…？』と思いつつ毎日楽しみに通るのですが、今年はいつまで経ってもオレンジ色の花をつけません。夏の暑さが続き、本格的な秋が訪れるのが遅いからではないかと思っているのですが、実のところはどうなのでしょう。

さて、24日（金）に“Move！”を行いました。今年も生徒たちは若いエネルギーをいっぱいに発散させ、走り、跳び、踊りました。グラウンドには一日中、笑顔と踏ん張る真剣な表情が溢れ、観ているこちらの側までもが幸せな気持ちになりました。

閉会式での成績発表の場面では、一つひとつの賞の発表のたびに生徒の間から大きな歓声が上がりました。その後のあいさつの中でも述べましたが、歓声や落胆の声は一生懸命に取り組んだ証拠なので、素晴らしいことだと思います。

競技全体を通じて、一つ気になることがありました。プログラムNo.7「トラップ競争」でのことです。「トラップ競争」とはいくつかのトラップを乗り越えてゴールを目指す競技です。かつては「障害物競争」とも呼ばれていましたが、本校では「障害」という言葉を使わないようにして競技名がつけられています。

「トラップ」の最後は、フラフープを一回くぐってゴールまで走るのですが、何人かがフラフープで縄跳びのようなことをしたり、本当にフラフープをしながらゴールを目指したりしました。観ている側は楽しい気分になせられ笑ってはいたものの、一部に『ふざけているのかな？』と思える部分があったことも否めません。昼休み休憩のあと、その真相を聞かされました。そのようなことをしていたのは主に運動部活動に所属している生徒たちでした。どうやら彼女らは、いつも自分たちが上位でゴールするので、そうでない人たちにもゴールテープを切る感触と喜びを味わってほしくてそんなことを企てたということでした。それでもなお『それはどうなんだろう？』と思われる部分もあるかと思いますが、私は彼女らの行為を素敵だと評価しました。

来年度から中学1年と高校1年に男子生徒が入学してきます。おそらく迫力が一層増すだろうと思われるため、男子生徒が一緒になって取り組む体育大会も楽しみです。プログラムや競技方法も一部は変更することになるかもしれません。

更に活発で楽しいMove！になることを願っています。大きな全校行事はこれで一応終了しました。このあと高校3年生は本格的に受験モードへと入っていきます。

みんなが有意義な学校生活を送ってくれるよう願ってやみません。



瀬戸の渦潮&綱引き

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『学校で教師が生徒にすべきこと』

19日(日)、平安女学院中学高等学校を会場に「第23回京都府私立中学校高等学校教育研究大会」が開催されました。この研究大会は、京都府の40校の私立学校の教職員が、各学校の垣根を越えて共に学びあう場として設定されています。

今年度の全体会では、歌手でエッセイスト、教育学博士のアグネス・チャンさんの講演があり、楽しみに参加してきました。アグネスさんは上智大学国際学部を経て、カナダのトロント大学(社会児童心理学)を卒業。芸能活動の他にボランティア活動、文化活動にも積極的に参加され、アメリカのスタンフォード大学で教育学の博士号を取得されました。1998年には日本ユニセフ協会大使に就任され、世界各地の現場を訪れては様々な危機にさらされている子どもたちの支援をされておられます。



フリー画像より

今回の講演でも、ご自身の目で見てこられた厳しい状況に置かれた子どもたちの姿を話されるとともに、私たちが一人の人間として感じなければならないことやしなければならないことについて、多くの示唆を与えてくださいました。

講演の冒頭、次のような話がありました。地震などの被災地を訪れた際に行うのは“Back to the school Campaign”と呼ばれる活動で、子どもたちを学校へ戻す取組だそうです。そうすることで、家族まで含めて各家の人々がどのような状況に陥っているのかがよく把握できるのだそうです。学校の先生には負担をかけますが、先生こそがそれを上手にやってくださいます、とも付け加えておられました。

これを聞いて、確かに学校は地域の拠点的な存在ですが、社会が進むにつれ、今はだんだんとそういった意味が薄れつつあるのではないかと感じました。また、併せて「子どもたちは、何のために学校へやってくるのか」について考え続けていました。

子どもは幸せになるために学校にやってきているはず。「子どもは勉強をしに学校へやってきます。」とは一般的な答えだとは思いますが、もちろん、国語や数学などの教科の勉強を身に着けることは幸せになることに結びつきます。しかし、それだけで幸せに暮らせるかどうかは分かりません。人との関わり方の勉強は特に大事です。議論することを通じて方向性を見出したり、協力しながら粘り強く取り組んだりすることで物事をやり遂げる喜びなどを学ぶことも社会で生きていく上では大事です。

そんなことを考えているときアグネスさんが次のように言われました。

「子どもに、自分の力に気付かせることが大事だ。」将にそれこそが私たち教職員のすべきことなのだと思います。勉強・スポーツ活動・文化活動のほか、友達関係づくりやリーダーシップなど、色々な力のある子どもがいますが、一人ひとりの子どもに自分の力に気づかせることができれば、その生徒は自己肯定感を上げて、何事にも自信をもって積極的に取り組むようになって自己実現をしていくと思うからです。

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『楽しんでいました！』

先週の金曜日、全校生徒で「大阪関西万博」に行きました。全校生徒と一緒に校外学習を行うことはほとんどなく、場所さえあれば全校生徒と教職員の集合写真を撮影したいと何度も思っていました。この件は後程詳しく綴るとして、その前に前号で触れた「評価の仕方が変化したこと」について質問を頂いたので少し説明をしたいと思います。



評価の仕方が大きく変わったのは2001（平成13）年4月からです。

それまでの評価が「集団に準拠した評価」（いわゆる「相対評価」）と言われたのに対して、この時から取り入れられたのが「目標に準拠した評価」（いわゆる「絶対評価」）です。学習指導要領を拠り所として各学校や教科担当が定めた目標を各生徒がどの程度達成したかを評価します。それまでの評価では「5」が10%、「4」が20%など、集団を成績順に序列化するのに対して、新しい評価では目標を達成していれば各評価（A・B・C）がつけられる割合は定められません。既に20年以上が経過して、今や当たり前のようにになりましたが、改革当初は戸惑いが確かにありました。

少々堅苦しい内容になりましたね。ここからは「大阪関西万博」の話に移ります。

朝8時、生徒たちはワクワク感を溢れさせて登校してきました。普段は遅刻気味だったり欠席が多かったりする生徒も朝から揃っています。そういう報告を受け、この時点で『この行事を実行してよかった』という思いになりました。

現地に到着しました。既に大勢の人で賑わっています。解散して暫く様子を観ていましたが、家族から頼まれた“ミャクミャクのぬいぐるみ”を購入しようと歩き始めます。すぐにその2つをリュックに詰めている高校1年生に出会いました。「どこで買えるの？」と訊くと、すぐ前の列に並んでショップに入ると言うのですが、既に長蛇の列ができ上がっています。最後尾につく気力が萎え、会場の雰囲気を楽しもうと歩き始めましたが全パビリオンに長い列ができています。時々、生徒たちのグループに出会いました。列に並んでいる子たちもいましたが、それでもワイワイ楽しそうです。カメラを向けると満面の笑顔でそれに収まってくれます。久々の感覚でした。

予約がとれて入場できた“大阪ヘルスケアパビリオン”には2時間近く居たにもかかわらず全部を観ることはできませんでした。そこで見た25年後の自分の姿は予想したものとはずいぶん異なり複雑な気分になりました。また、日本館・アメリカ館・フランス館・イタリア館などの人気パビリオンにも訪れたくなり、この万博にリピーターが多いのが分かる気もしました。生徒たちのたくさんの笑顔に触れ、楽しそうに振舞う姿を見るにつけて、思い切って実行してよかったと再認識した次第です。

「大阪関西万博」、何年経っても生徒たちが覚えてくれていることを願ってやみません。

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『楽しみの前に』

一昨日は中秋の名月。帰宅途中に東の空の大きく明るく美しい月を何度も見上げました。ところで、いつの間にか朝夕の気温がめっきり下がっています。つい先日まで「暑い、あついっ！」と繰り返し言っていたのがウソのようです。“暑さ寒さも彼岸まで”とはうまく言ったもので、確実に季節は巡りようやく秋がやってきたようです。そうそう、家に帰って情報番組を見ていたところ、中秋の名月は満月とは限らないのだそうです。今年に関してはそれが一日ズれており、昨日が満月だということで、なんだか二度美しい月を見ることができて得をしたような気分になりました。

さて、昨7日から高校生が、そして今日からは中学生も2学期の「中間考査」に取り組んでいます。内申の成績を上げる必要のある高校3年生は特に頑張らなければなりません。皆さん、一生懸命に取り組んでいます。もう40年以上前のことになりますが、私が高校3年生の頃、『こうしたテスト前の緊張感も嫌いじゃないな！』と思いながらこの時期のテストに臨んだことを思い出します。そういえば、定期考査の在り方というのは私の頃も今もそう変わらないですね。おそらく、英語のテストにリスニングが入ったことと評価の在り方が変わったことくらいで、もっと前の時代とも大きくは変わらないのではないかと思います。グループ学習やICTの導入など授業の在り方が大きく変化した一方で不思議な気もします。

とにかく、生徒たちには頑張って少しでも良い点数をとってほしいと願っています。

この考査が終わると10日（金）には全校を挙げて「大阪関西万博」に行きます。

春にこの行事を決めた時の大きな理由は、「入場者数確保のために小中高生と引率の教職員の入場料を自治体が負担してくれる」ということ、「季節もよいし、テストも終わった頃で気分的にも丁度よいので」ということでした。ところが、開催期間終盤の今、所謂“駆け込み入場”で大変な混雑となっており、少々戸惑っています。

55年前の大阪万博の際、私の通っていた小学校では5・6年生が学校から行きました。当時4年生だった私は残念な思いをしました。その後、家族で行ったのですが、大変な賑わいとそれに伴う活気・熱気とは今もよく覚えています。今の中高生にとっても、この先、万国博覧会が近くで開かれる機会がどれだけあるかわかりません。是非ともUSJやディズニー・リゾートへ行くのとは異なる感覚を心に刻んでほしいと思います。私自身、こうして学校行事に組み込んでいなければ行っていたかどうか分かりませんが、今はとても楽しみにしています。幸い、心配された台風の影響もなさそうです。中間考査をしっかりと頑張り終えて、大阪関西万博を楽しみたいものです。



公式HPより

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校
澤田 清人

『Open School』

「オープン・スクール」とか「オープン・キャンパス」という言葉が当たり前になったのはいつごろからでしょうか。少なくとも、私が中高生の頃には聞き覚えがないし、それに行った記憶也没有。しかし、私が教師になった頃にはありました。進路担当の先生が生徒に対して積極的に参加するように勧めておられたのをハッキリと覚えています。

よくよく考えてみれば、自分が通いたいと思う学校について、受験前から深く知っておくことは極めて重要です。実際に行ってみて、自分の目で確かめて理解したうえで受験校に定めることには大きな意味があります。

私の場合、受験したい高校は一つしかなかった。なので特段事前に行ってみるということもしなかったのですが、もしかしたら私の友人の中には行ってみて受験を決めた人がいたのかもしれない。それでも、今のように高校の側が大々的に開催してはいなかったと思います。

少子高齢化がものすごい勢いで進行し、公立・私立に関わらず、学校は生徒の獲得に尽力せざるを得ません。京都市立の中学校の各学年が8～9クラスあるのが普通だった頃と今とでは受験や生徒募集の状況は決定的に違っています。

9月27日（土）に今年度3回目のOpen Schoolを行いました。秋のOSは中学生が本格的に動き出す時期に行うものなのでどの学校も力を入れます。来年度から共学化する本校でも、今回はその集客の段階から特に気合を入れて取り組みました。各中学校や学習塾への訪問活動の甲斐あって、在籍する本校生徒と変わらないほどの児童生徒に来ていただくことができました。保護者の方と合わせると、かつて経験したことのないほどの人数に対応するという忙しくも嬉しい一日になりました。

今回は部活動体験がその中心でしたが、迎える側として教職員はもちろん生徒たちもワクワク感をもって準備し、取り組みました。当日は、学校全体が活気と熱気に包まれ、上の写真の通り学校中に笑顔が溢れました。参加して頂いた人たちのアンケート結果からも、嬉しいことにほとんどが“満足”の評価を頂くことができています。

多くの方が来年度の本校生徒になってくれることを強く望みます。その方々と共学校としての新しい京都光華中学校/高等学校を創りたいという思いを強くしました。Well-Being な社会を共創する人財を一人でも多く本校から送り出したいのです。



9月27日のOpen Schoolより

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『誇り』

9月21日（日）亀岡運動公園体育館。

記念すべき本校空手道部の初めての大会があり応援に行きました。選手たちは「形」の部に出場しました。相手と組んで闘うことこそありませんが、それでも二人一組で競技し、競技後は三人の審判が判定を下します。二本以上の旗を獲得すると勝ちです。

生徒たちは、それぞれ中学生初級の部、中学生上級の部、高校生の部に出場しました。

開会式直後 本校選手が演武を披露

初めて試合に出場する選手もあり、さぞかし緊張したことでしょう。相手はみな経験豊富な人で、試合開始の名前を呼ばれるや大きな声で堂々と返事をする選手たちです。競技中も所々の“決め”の箇所では気合の入った大声を発します。「いえーい！」「うおー！」「いゃー！」。観客の私はそれだけ聞いても気後れしそうです。共に競技している彼女たちの心境は如何ばかりだったでしょう。『ビビっていなければいいが…』祈るような気持で見守りました。それでも淡々と競技し続けます。予定通りの技をやり終えて静かに礼をし、相手の演技が終わるのを伏し目がちに唯一点を見つめて待ちます。なんと凛々しい姿でしょうか。その立ち居振る舞いに感動を覚えました。

競技を終えて戻ってきた彼女らの目に涙が溢れます。初めての試合を終え、緊張感から解放された気の緩みもあったでしょうが、何ととっても敗れた悔しさが滲んでいました。誰が見ても勝敗は歴然としています。もちろん本人たちも勝てたとは思っていないと思います。それでも悔しくて泣いています。三人とも「悔しい」とか「緊張した」とか「次こそは…」とかいうことを何もしゃべりません。唯々涙を流しているのです。その高潔さに心を動かされました。

彼女らにその姿をさせたのは「光華中高等学校空手道部の部員」であるという誇り以外の何物でもないと思うのです。この短時間にそれをもつに至った彼女ら選手たちに“アッパレ！”と言いたいです。同時にそうさせた指導者の先生方にも謝意と敬意を払いたいです。この調子でいけば、必ず近い将来「強い部」いや「誇り高い部」になると確信します。京都光華中学校高等学校空手道部、とても良い船出をしました。

同日、第58回「近畿高等学校ユース陸上競技対抗選手権大会」が和歌山市の紀三井寺公園陸上競技場で行われ、本校の1年が学校対抗で優勝を果たしました。

100m・200m・走り幅跳びで優勝、400mH・三段跳びで2位、100mYH・4×400mRで3位、円盤投げで5位、3000mで6位、棒高跳びで7位、3000mW・やり投げで8位と、将に堂々たる成績です。こちらには応援に行けなかったのですが、選手たち一人ひとりの誇りに満ちた笑顔が容易に想像できます。

結果が出ようが出まいが、「誇り」が選手たちを磨くことに間違いはないようです。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『恩送り』

中学生の作文を読んでいて「恩送り」という言葉に出会いました。長い間生きてきて、これまで聞いたことも使ったこともない言葉で、恥ずかしくもあり驚きでもありました。

誰かから受けた恩や善意を、直接その人に返す「恩返し」とは異なり、別の第三者に渡して広めていく行為のことです。作文では、電車の中で座席を譲ることを例に次のように説明されていました。

自分が小さかった時や怪我をしていた時に席を譲ってもらって嬉しかったこと。その時の人へのお返し（恩返し）はできないけれど、別の人のためにしようと思う、と綴られていたのです。また、こうした行為が世の中全体を幸せにしていくとも書かれてあり、書き手が中学生とはいえ感心させられました。

同時に『ペイ・フォワード』（2000年 アメリカ）という映画を思い出しました。

映画は、確か社会科の先生が中学生に次のような課題を出すところから始まります。

「もし、君たちが世界を変えたいと思ったら何をするか？」

主人公の中学生が考えたのが“ペイ・フォワード”です。

それは、自分が受けた善意を誰か3人に贈る。その3人もまたそれぞれに新たな3人に贈るというもの。これを繰り返していけば、やがて世の中は善意に溢れ、社会全体が幸せになっていくという、いかにも中学生が考えそうな内容です。映画では、少年から小さな善意を受けた大人たちが次々と次第に大きな善意をつないでいくさまが描かれます。やがてその街全体に大きな変化が現れるのです。

話を中学生の作文のことに戻します。

私たち教師は中学生や高校生に教えることを生業とします。教科の学習を中心としますが、それ以外のことを教えることも多いです。しかし、実は今回のように生徒らから教わるのがたくさんあります。もちろん、生徒らには教えているという自覚はありません。私たちが生徒らの言動や作品や成績から学ばせてもらっているのです。

中高生の感性は素晴らしいです。先週の光華祭の中でもそれらがたくさん見られました。演技の中で、合唱の中で、ダンスの中で、演奏の中で、中高生が自ら考え出すアイデアや言動や作品に驚かされたり感心させられたりの連続です。そして、そのたびに私たちに学びがあります。

とまれ、生徒らが繰り出す物々は、いつか私たち教師や親などの大人から学んだことなのかもしれません。生徒らは学んだことが自分に役立ったと思い、それを別の人に送っているのかもしれないと思うのです。こうした学びの連鎖はいつか立派な「文化」になります。中学生の作文から20年以上前に観た映画を思い出し、多くのことを考えるきっかけをもらいました。尊い仕事に携われていることを嬉しく思います。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『“楽しい”の意味』

12日（金）・13日（土）の2日間、『光華祭』を行いました。去年まで『おおきに祭』と言っていたものを生徒会の人たちから名称変更が提案され、今年度から正式に『光華祭』となりました。

さて、1日目の閉会式で話した内容を改めて記しておこうと思います。この話は2年の演劇と1年の合唱の表彰式直後のものです。

「今、表彰をしました。審査結果が発表されると大きな歓声が上がりました。感激で涙する人さえいたようです。私はこの光景を見るのが大好きです。歓声は一生懸命に取り組んできた証拠だからです。一方で、悔しい思いをしている人が少なくないとも思います。それもまた一生懸命に取り組んできた証拠です。喜びも悔しさも一生懸命の証拠で、この心身の動きこそが青春の証です。こういうことはおそらく高校時代が最後です。この気持ちを大切にしてほしいとも思います。そして、この瞬間に心が豊かに耕され成長していることを認識してほしいです。」

当日から翌日にかけて、多くの人と今年の演劇と合唱について話をしました。嬉しい思いをした人も悔しい思いをした人も『楽しかった!』といいます。楽しかったのは勝った人たちだけではないのが面白いところです。結果がどうあれ、一生懸命に取り組んだ人は『楽しい』と思えるのだと改めて感じました。

今年も吹奏楽部の演奏をバックに歌とダンスをさせていただきました。うまくいかなかった部分もありましたが、私もとっても楽しい時間を過ごさせていただきました。

もう一つ伝えたいことがあります。昨（15）日、中学校陸上競技の秋季大会が行われました。そこで2年生が円盤投げで2位になりました。昨年度のこの大会で、彼女が円盤投げに出場すると聞いて驚きました。当時1年生だった彼女は陸上部員の中でも最も体が小さく思えた選手だったからです。（実際そうだったと思います。）顧問の先生は、競技の性格と彼女の可能性を考えてこの競技に抜擢したのでしょう。来る日も来る日も円盤を投げ続けました。やがてそれが回転するようになり、徐々に飛距離を伸ばしていきました。今春には見違えるような距離を投げるようになりました。

運動選手にとって結果が出ることほど嬉しいことはありません。おそらく彼女は今、心から「楽しい!」と思っていることでしょう。目標を定め、それに向けて一生懸命に取り組むことが真の“楽しさ”なのではないかと、改めて思っているところです。



演劇・合唱・部活発表の各シーン

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『このワクワク感がたまらない』

明日から2日間、『光華祭』が始まります。

今、生徒も教職員もその準備で忙しくしています。合唱練習の歌声が聞こえてきます。校長室の前を忙しそうに通っていく足音がしょっちゅう聞こえます。先ほど、カメラを片手に1時間半ほどかけて校内を回りました。想像していた通り、生徒や先生方が楽しそうに活動しています。



「校長先生、歌の練習のし過ぎでのが痛いです。」ニコニコしながらそう言った生徒がいました。「校長先生、絶対うちのカフェに来てや！ 2回来て。朝と昼と2回！」模擬店でカフェを営むクラスの生徒です。こういう時の生徒は13歳の中学生も18歳の高校生も変わりありません。みんなが可愛い女子です。

こうした環境に長いこと居させてもらってきました。本当に幸せで、恵まれてきたと思います。また、こうした楽しい時間を若い生徒たちと共有できる教師という職業を選んでよかったと思い直す機会にもなります。

今日のようなときは担任の先生を羨ましく思ったりもします。また、担任だった若い頃のことを思い出したりもします。ヤンチャな生徒たちが真面目に合唱に参加せず、一生懸命にやろうとする生徒たちと揉めて、女の子たちが泣き出したことがありました。担任の私が大きな声で叱った結果、練習が最悪な雰囲気になってしまったこともありました。そんなこんなを乗り越えて本番が成功し、入賞発表の際にクラスの名前が呼ばれると生徒が感動で泣き出し、こちらまで涙した経験は少なくありません。

ひとつ忘れられない出来事があります。普段は記憶の奥底に沈んでしまっているのに不思議とこういう時になると思い出すものです。

なかなかまとまらなかった合唱が本番になって一つになった思い出です。いい加減な態度で臨んでいた生徒たちが本番で一生懸命に歌い出したのです。どういう心境の変化があったのか、私の知らないところで別の生徒たちの働きかけがあったのかもしれません。とにかく、練習でもできなかったほどの歌声が響きだしたのです。最初に指揮者が泣き出しました。泣きながら指揮をする姿を見てクラスの生徒たちが歌いながら泣き出しました。照明に涙が光り、その様子を観た保護者の方をはじめとした観衆の頬にも涙が伝いました。最優秀賞という結果は得られなかったけれど、クラスの生徒にとって、そして担任である私にとって最高の瞬間を経験することができました。

行事は心を豊かに育ててくれます。明日の本番に向け、ワクワクしながら一生懸命に準備する生徒を心から愛おしいと思います。本番でもっともよいパフォーマンスをしてほしいとも願います。勉強や部活動やその他のことは一旦忘れて、光華祭に没頭し、思いっきり楽しんでほしいと思います。そして心を成長させてほしいものです。

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校
澤田 清人

『皆様のおかげです』

9月3日（水）第5回「古典の日文化基金賞」授賞式が京都コンサートホールで行われ、本校の伝統文化学習が「未来賞」を受賞しました。高校生と中学生の代表者と一緒に授賞式に参列させていただきました。

この賞について、右のパンフレットの下半分に次のように記されています。

11月1日が「古典の日」として制定されたことを記念し、彬子女王陛下を名誉総裁に奉戴して、日本の古典文化の推進に寄与することを目的に「古典の日文化基金賞」を創設しました。「文化・思想」「伝統芸能・音楽」「美術・生活文化」の3つの分野と、若者達の古典文化活動を応援する「未来賞」が贈られます。古典の普及、活性化に役立つことを願い、日本の古典文化振興のために力を尽くしている全国の皆様の励みとなることを願っています。

審査委員には主催者代表の村田機械株式会社取締役会長の村田純一氏をはじめとして、文化庁長官、京都府知事、京都・宇治市長などが名前を連ねておられます。因みに本校は松村淳子宇治市長から賞状と記念の盾、賞金をいただきました。

受賞後にインタビューがあったのですが、私は次のように答えました。

Q：今のお気持ちをお聞かせください。

A：今年度で23年目を迎えており、在校生・卒業生ともに本授業を受講したことを誇りに思っています。昨日、この授業があり、各授業の先生方に受賞の報告をしたところ、皆さま大変喜んでくださいました。本賞は、卒業生も含めた多くの皆様方のお陰です。大変うれしく思っています。

Q：これからの目標をお聞かせください。

A：本校は85年間女子校としてやってきましたが、来年度から男子を受け入れます。男子を含めて本授業を更に発展させていきたいと思っております。

また、今後ますます社会はグローバル化が進むと思います。卒業生たちは国の内外で外国人と接する機会が増えるでしょう。その際に日本の伝統文化に触れた経験やそれについて語れることは極めて大事です。“和の心”を身につけさせたいです。代表の中学生・高校生の受け答えも大変立派で、高い評価を得ていました。本賞の受賞を励みに本校教育を益々前進させたいと決意を新たにしているところです。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『伝える力』

バイク通勤をしている私は、出勤時に走り始めた際の空気で季節の変わり目を感じます。昨朝は“ひやっ”として、前日までとは違った空気感になっていました。相変わらず日中は猛暑が続きますが、確実に季節は変わり始めています。

さて、2学期が始まって1週間が経とうとしています。授業も本格的に始まり、学校に本来の落ち着きが戻りつつあります。25日(月)の始業式では

「将来の自分像を思い描いてみよう!」という話をしました。私の息子の話を例に出して考えやすいようにしたつもりです。生徒の皆さんについては、実際には目の前のことで精一杯だとは思いますが、折に触れて将来の自分像についても考えてみてほしいと思っています。そして、自分をその像に近づけるために何をしなければならないのかについても併せて考えてほしいです。何年か先、今思った通りの人生を歩んでいなかったとしても問題ありません。人生は思った通りにいかない場合の方が多いものです。でもやはり、理想の将来像をもって生きること、そのためにしなければならないことを考えたうえでコツコツと実践することには大きな意味があると思うのです。

話の後には恒例の“夏休みスライドショー”を上映しました。今年も生徒の皆さんの夏休みの活躍の様子を記した写真を“ハナミズキ”のBGMに載せてスライドショーで紹介しました。全校生徒の皆さんが画面に見入ります。照れくさそうに画面を見る子、隣の子に何やらささやく子、目を潤ませながら観る子など様々です。現在、クラッシーにて配信中なので、是非とも保護者の方もご覧になってください。

私の話の後はいつもの通り感想や意見、決意の表明場面です。今回は中学生が7人、高校生が4人登壇してきました。「みんなに応援してもらったお陰でよい成績が収められた」「今年の結果には悔いが残るので、高校でそれを晴らしたい」「夢に向かってこの2学期に精いっぱい頑張りたい」など、思い思いの発表です。そうそう、中には今年の光華祭での部活発表の宣伝をしている人もいました。ともあれ、皆さん立派に全校生徒の前で自分の気持ちを表現していました。

うちの学校では当たり前のようなこの光景ですが、400人以上が集う場で発言するには大人であってもなかなかの勇気がいります。この取組は本校の大きな特徴で、この場で堂々と発言する生徒の皆さんの姿は私たち教職員の自慢です。

私がこの取組を行っている理由は、本校生徒には将来どのような場面でも自分の考えや思いを堂々と発言し、理路整然とそれを伝えられる人に成ってほしいという思いがあるからです。社会を生き抜くために必要な力はいくつもありますが、この力は重要です。高い学歴、豊富な知識、上手な資料作成能力が幾らあろうと、それを「伝える力」がなければ意味がないからです。今後もこの力を伸ばしていきたいと思っています。



始業式での生徒スピーチ

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『一步を踏み出す』

夏休みには生徒が活躍する場面をたくさん見てこちらの方がエネルギーをもらいました。特に記録に残る結果を得られたのが4つあります。高校ソフトテニス部のインターハイ個人・団体での準優勝。中学ソフトテニス部の団体戦での全国大会出場。中学陸上競技部の近畿大会団体優勝。吹奏楽部のコンクールでの金賞受賞です。インターハイ準優勝は特に素晴らしい記録です。団体戦は初戦から観戦しましたが、楽な試合は一つもありませんでした。どの戦いも接戦で、『あそこで負けていてもおかしくない』と思える場面がたくさん思い出されます。ギリギリの戦いを勝ち切る生徒たちの技術と体力、精神力に感動を覚えます。同時に、それを引き出す指導者や応援する保護者等の技術と熱に感服もします。以下は山口で思いつくまま生徒に話した内容です。



「このチームが発足した当時、インターハイの決勝戦を戦うチームにまで成長するとは思っていなかった。でも君たちはここまで来た。高校生の無限の可能性を再認識させてもらった。併せて、今後に大いに期待する。今年を越えるには“全国優勝”しかない。2年生以下の人たちはそれを目指してますます練習に励んでほしい。選手の力をここまで引き出してくれた監督・コーチ・トレーナー、本当に有難う。先ほどキャプテンが保護者に向かって感謝の言葉を述べたけれど、保護者の方も君たちの一生懸命に頑張る姿を見ることが喜びであり楽しみでもある。保護者も君たちに『応援させてくれてありがとう！』って思っている。」

結果がすべてではありません。でも、努力しても結果が得られなければモチベーションは上がりず次へも繋がらないものです。勉強でもそうです。模擬試験等でよい成績が得られることで『次はもっと頑張ろう！』と思えたりもしますからね。

さて、2学期が始まります。この長い期間には様々なことがあります。光華祭・Move!・高校2年の研修旅行。その間に2度の定期考査と部活動の試合。また、高校3年生のほとんどが進路を決定します。さらに、共学になる来年度に向けて、新入生の募集活動が本格化してもきます。始まったら留まることができないくらいに忙しい日々が待っています。しかし、それがまたやりがいでもあります。

この2学期、積極的に行動しましょう。『どうしようかな』と思ったらやってみることです。たとえ上手くいかなかったとしても、何もしなかったよりも確実に得られるものがあるはずです。『一步を踏み出す』勇気とその意味を考えてポジティブな考え方でアグレッシブに動ける2学期にしましょう。そうすればきっと結果が変わってきます。

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『素晴らしい結果』

高校のソフトテニス部が素晴らしい結果を残してくれました。何と、高校総体（インターハイ）で準優勝を果たしたのです。スポーツをしている全国のほとんどの高校生の目標はインターハイ出場です。その夢舞台で決勝戦まで勝ち上がったことは快挙だと言っても過言ではありません。

団体戦は7月31日に行われました。前日の個人戦でも準優勝をした原・西村ペアが好調で、チームの核となっていました。もう1ペアの太田・松井ペアも個人戦でベスト8に入賞しており、この2ペアが“勝ち駒”となって団体戦を戦いました。

団体戦は3ペアの点取り戦で行われます。3ペア目は監督の采配で相手によって替えられます。その采配もすべてうまくいった様です。ベスト4をかけた大阪府代表の昇陽高校との一戦では、伊藤・山本ペアが相手の1番手を倒す殊勲をあげました。因みに、昇陽高校とは同じ近畿勢でもあることから度々対戦するライバル関係です。昨年の中学校の全国大会では決勝戦でこの学校に勝ちましたし、今夏の高校近畿大会の決勝戦もこの学校に勝利して優勝しました。これまで何度も惜敗し、悔し涙を流してきた好敵手なのです。昇陽戦の勝利が大きな弾みになりました。実績豊富な和歌山県の信愛高校を破った山形県代表の羽黒高校戦も苦しみながらも勝利しました。この辺りになると、勝敗の決め手になるのは1ポイントです。振り返ってみて「あの1本が取れたから勝てた」と思えるポイントがあるものです。そんな厳しい勝負を制して決勝戦まで勝ち上がりました。一方、優勝した東北高校は絶対的な力の持ち主です。昨年度のこの大会でも優勝し、今年度は連覇を掛けて臨んでいます。前日の個人戦の優勝ペアも東北高校の選手で、ペアの一人は昨年度17歳で皇后杯（全日本総合選手権）チャンピオンになった選手で、“天才”と呼ばれている逸材です。

そのような相手に対しても最後まで諦めることなく戦い抜きました。全力を尽くして戦うその姿が感動的で魅力的でした。実はこの選手たちが主力になった昨秋、不安もありました。その子たちがインターハイで準優勝をする選手へと成長を遂げたのです。高校生の無限の可能性と監督やコーチ陣の選手の力を引き出す能力に感服します。

保護者の皆様方とも沢山お話しができました。引退する3年生の保護者からは「忙しかったけれど本当に楽しかった」と聞きました。また新しいチーム作りが始まります。次はどんなチームになるのでしょうか。今年を上回るには全国1位しかありません。



8月1日付 「京都新聞」 15面より

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『自己を成長させよ』

夏休みに入って10日が経ちました。生徒たちは夏の活動に全力投球しています。

私はというと、生徒たちのそうした姿を観るのが楽しく、あちらこちらへと走り回っています。19日には「中学校のバドミントン」の大会、21日には「高校のソフトテニス」の近畿大会、24日には「中学校ソフトテニス」の京都市大会、そして、26日には華道部の「花の甲子園」近畿大会、28日には「中学陸上」の府大会の応援に行ってきました。また、その合間の23日には「高校特進アドバンストコースの学習合宿」の激励にも行きました。こちらの場所は亀岡の温泉街にある施設で、この時は支配人さんから温泉入浴のプレゼントをもらいました（嬉しい笑）。

さて、種目は違って目標は同じ。“勝つこと”、“勝ち抜いて次のステージへに行くこと”です。もちろん、そのみに終始してしまってははいけませんが、“勝ち”を追求することがなければ、しんどいことに耐えて頑張るという努力もできません。また、結果的に勝てなかったとしても、それに向けて最大限の努力をすることで得られるものがあるとも思います。目標に向けて全力を尽くす過程で人間性が磨かれもします。中高生のあらゆる活動は人間性を磨くためにあると言っても過言ではありません。

目標を見失しなわずに努力し続けること、失敗を恐れずチャレンジすること、少々失敗しても簡単にあきらめないこと、仲間と協力・協調しながら取り組むこと、こうした過程で目に見えにくい力（「生きる力」）が身に付くのだと思っています。京都光華ではこうした力を身に付けることを大事にしています。そしてもう一つ大事にしているのが、こうした活動をさせてもらっていることに対する感謝の気持ちを忘れないことです。これについては生徒の多くがよく口にします。「応援してもらっている家族や先生方をはじめ、多くの方々への感謝の気持ちを忘れず…」本当に素敵です。

「花の甲子園」と「高校ソフトテニス近畿大会」は特に激戦でした。観ているこちら側が、息をするのも忘れるくらいの緊張感の中での戦いでした。簡単な戦いではなかったからこそ、それを終えたときの成長も大きかったと思います。上の写真からも分かります、戦いのあとの表情がそれを物語っているように見えます。

まだまだこれからこうした戦いの日々が続きます。そして、そのたびに生徒は成長していきます。その成長を見守り、ときに励ますことができること。こうした立場にある教師という職業を改めて誇らしく嬉しく思う夏休み初旬です。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『夢 = Dream』

18日で1学期が終了しました。終業式では『夢』をテーマに話をしましたので今回はその内容を以下に紹介します。

『夢』といった場合、日本人の多くは“寝ているときにみるもの”をイメージしがちですが、欧米人は“成りたい自分”を考えるそうです。今回の終業式では後者を中心に話を進めました。

『夢』は幾つあっても構いませんし、自分の『夢』を照れくさがる必要も全くありません。ましてや、他人の『夢』を笑ったり馬鹿にしたりするなどは絶対にしてはならないことです。

終業式では、『夢』を叶えた先輩たちを紹介しました。医師・CA・看護師・演奏家・教師・宝塚女優・オリンピック出場、そしてミスコン日本代表。何年か先に今の生徒の中からここで紹介できる人が現れてほしいとも付け加えました。

その中で、今回は特に“Miss Elite Japan 2025 年度日本代表”に選ばれた先輩に来てもらってお話を聞かせてもらいました。とても分かりやすい内容で、生徒の心にも届いたと思います。特に印象に残ったことが2つあるので書き留めておきます。

1つ目は上手くいかない時のこと。人生はいつも上手くいくとは限らない。思い通りにならなくて悔しい思いや悲しい思いをする時もある。そんなときは、思いっきり泣いて、そして気持ちを切り替えよう。『このことは自分には合わなかったんだ』と思うこともアリかも。思いっきり泣いたら気持ちがスッキリしてまた頑張れることもある。2つ目は、女性であることと若いということを大きな武器として今を一生懸命に生きること。女性であることは変わらないが若さはずっと続くわけではない。若い頃だからできる挑戦がある。女性であること、若いというこの2つがある今こそそれを活かしてやりたいことを見つけ、その挑戦に全力を尽くしてほしい。

この先輩も、日本代表となるまでは様々な苦勞をしてきたのだと思います。たくさん悩み、苦しみ、時に絶望し、夢をあきらめかけた時もあったのでしょう。家族や周りの方に支えられたりもしたようです。話を聞くうちにそんなことが垣間見えました。

私と先輩の話を聞いて、今回も5人の中高生が壇上に上がってきました。自分の『夢』を堂々と語る人、夏の大会に向けて意気込みを語る人、『夢』を追いかけるのに不安を感じていることを涙をこらえながら語った人もいました。

『夢』はみんな違ってよいのです。本校生徒の素晴らしさは、仲間の『夢』を尊重し合っているところです。この夏、『夢』の実現に向けて全力を尽くしてください。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『ことばの力』

国会議員の失言が大きな話題になっています。

今回は「運のいいことに能登で地震があった」という発言内容ですが、時々聞かれるこういう失言を「信じられない』と思うのは私だけではないと思います。

会見の様子は既にネット上にあげられていて私も何度か見ました。前後の言葉がある中での発言で、このことばが一番言いたかったことではないことも分かりますが、国の方向性を決める任務を負う国会議員が、多くのメディアの前で発言するなど到底考えられない大失言で、呆れかえるばかりです。



フリーイラスト集より

ことばには力があります。今回のように人を傷つけ、痛めつける場合もありますが、反対に、励ましたり勇気づけたりすることが多いのも「ことばの力」です。実際、そのように信じているからこそ、私もこうしたエッセイの配信を続けているのです。

実は、今も週に1回大学で教師を目指す学生に講義を行っています。私の受け持っている人権教育についての教職必須科目の中で、講義の集大成として学生に模擬授業を課しています。人権に関する指導案を作成し、その中の10分間を学生相手に授業するという課題です。対象学年が主に2年生なので、学習指導案の書き方から指導しますがなかなか苦労しているようです。今回、アンパンマンを教材として『差別に気づく心と勇気ある行動』という目標を掲げて指導案を作成した学生がいました。私は、この放送が始まった頃には教師として勤めていました。我が子が大好きだったので今も口ずさむ程度はできますが、改めて歌詞を見てその奥深さに気づかされました。

「①なんのために生まれて 何をして生きるか 答えられないなんて そんなのは嫌だ 今を生きることで 熱い心 燃える だから 君は行くんだ どこまでも そうだ 嬉しいんだ 生きる喜び たとえ 胸の傷が痛んでも ああ アンパンマン 優しい君は 行け みんなの夢 守るため ②なにが君の幸せ 何をして喜ぶ 分からないまま終わる そんなのは嫌だ 忘れないで 夢を こぼさないで 涙 だから 君はとぶんだ どこまでも そうだ おそれないで みんなのために 愛と勇気だけが ともだちさ ああ アンパンマン 優しい君は 行け みんなの夢 守るため 時は 早く 過ぎる 光る 星は 消える だから 君はいくんだ 微笑んで そうだ 嬉しいんだ 生きる喜び たとえ どんな敵が 相手でも ああ アンパンマン 優しい君は 行け みんなの夢 守るため」

指導案の教材観には次のように書かれています。「…この歌詞には『生きる意味』『他者への思いやり』『困っている人に寄り添う勇気』など、人権に関する深いメッセージが込められている。特に『差別に気づき、行動すること』の大切さを主人公のアンパンマンの姿を通して考えさせることができる…」 強い「ことばの力」を感じます。

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『祇園祭の豆知識』

今年のように6月に梅雨が明けるのは珍しく、長く生きてきた私でもあまり記憶にありません。例年より20日以上も早い梅雨明けだそうで、京都市では通常7月17日の祇園祭の頃にその時期を迎えます。

生徒とそんな話をしていたらその子たちが大きな勘違いをしていることに気づきました。祇園祭は7月17日に開催されると思っていたことです。完全に間違っている訳ではありませんが、正確ではありません。

祇園祭は7月1日に始まって31日まで1か月間に渡って続く祭です。その中のメインイベントとして17日に山鉾の巡行が行われるのですが、この行事が



四条河原町の辻回しフリー写真集から

あまりにも有名で、また、それに併せて「宵山」「宵々山」での露店の賑わいに観光客を含む多くの人が集まるのでこの日が祇園祭だと思い込んでいたようです。この勘違いはこの時に話した生徒たちだけでなく、京都市内に住んでいる多くの人たちも同様に思っているかもしれません。そこで、今回は祇園祭について少し解説します。

そもそも祇園祭の起こりは平安時代です。当時夏に疫病が流行することが多く、多くの人命が失われていたようです。当然はワクチンがあるわけでもなく、人々は祇園の神様の力に頼るほかなかったのです。人々は祇園の神様にお神輿に乗って出てきてもらい市中の疫病を鎮めてもらおうと考えました。庶民の力が強くなってくると、自治組織体としての集団（鉾町の原形）が生まれ、競って豪華な山や鉾を創りそれを掲げて自分の町内に神様を迎えようとなりました。ところで、実はこれも最近まであまり知られてはいなかったのですが、この理由から祇園祭にもお神輿が出るのです。さらに言えば、山鉾巡行は、お神輿に乗っておられる祇園神社の神様を迎える【神迎えの儀式】なのです。この文章を読んで興味を持たれた方は、一度7月17日の夜6時頃、祇園の石段下へ行ってみてほしいと思います。勇壮な3基の神輿を見ることができます。ここから3基の神輿が定められたルートで京都市内を清めて歩くのです。（神幸祭）

私は祇園神社の前にある中学校に20年間勤めました。この地域の人たちにしてみれば祇園祭の本質は神輿にあります。男子生徒は中学3年生ともなると神輿の担ぎ手として活躍します。地域の大人たちも担ぎ手となった者を一人前として認め、そういう扱いをするようになります。17日に都合がつかない人は、四条寺町東入南側に「御旅所」があるので一度訪れて欲しいとも思います。そこに1週間3基の神輿が収められており、誰もが見学でき柏手を打つことができます。そして、このお神輿は24日のやはり夜に祇園の社に戻られることになります。（還幸祭）

私たちは自分の住んでいる地域についても知らないことが案外多くあります。それらについての学びは興味深くもあるし知らなければならぬことでもありますね。

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『変わっていくことと変わらないこと』

朝の情報番組に「小学校の授業から水泳が消える」という報道が流れ、思わず動きを止めてTV画面に見入りました。小学校や中学校で危険だからと組体操がなくなっていった時の残念な気持ちを思い出します。練習を重ねて本番にやっと成功した組体操あの感動を思い出しました。また、BGMが流れる中で一生懸命に演技する小学校6年生のわが子の組体操



花山中学校の校長時代の写真集から

も思い出しました。安全面が大きく取り上げられると取り止めになるものが案外多いのです。「危険を顧みずに…」と言いたい訳ではありません。安全に十分留意しながら緊張感をもって取り組むからこそ成功した時の感動も大きいのだと思います。報道を見た瞬間は『またそんな経験が一つ奪われてしまうのか!』と思ったものです。

ところが、今回は少々違っていました。水泳の授業は各クラス年間10時間ほどですが、このために各学校がプールを運営していく上の苦労は実は相当大きいのです。小学校では、低学年と高学年とでは水位を変えます。低学年が使った後で水を足して高学年がプールを使用します。そして、翌日に低学年が使うまでに多くの水を放出するのです。毎日この繰り返しですから高額な水道料金がかかります。また、水泳時の事故がなかなか無くなりません。プールでの事故は命にかかわることが多いので各学校では特に神経を使います。授業時に監督の人数が少ないことも課題になっています。そこで、スイミングスクール等の施設に委託して水泳の授業を行う自治体が増えているというのです。バスでの送り迎えを入れてもその費用は随分と節約できると報道されていました。また、多くの学校がプールの改修時期を迎えていて、その費用が1億5千万円くらいかかるというからこれも大変です。報道はそんな内容でした。

暑い夏の時期、エアコンのない当時の学校ではプールの授業が楽しみでした。夏休みには毎日のように学校のプール開放に出かけました。(当番制とはいえ、先生方は大変だったと思います。) 私たちが当たり前のようにやったことがこれからの子どもたちに経験させてやれないのは少々寂しい気もします。

一方で、先週の土・日曜日には中学校陸上競技の京都市大会が開催されました。本校の中学生たちは前週の高校生に負けじと頑張りました。1年100m、800m、100mH、四種競技、低学年4×100mRで優勝したほか、1500m、4×100mRで準優勝を果たし見事に団体総合で5連覇しました。

総合得点 女子	
1位 京都光華 89点	5位 西院茂 27点
2位 桂 57点	6位 香北 26点
3位 大華 34点	7位 同志社 23点
4位 下京 27点	8位 京都御池 22点

選手たちの競技に向かう気持ちは私たちの頃と全く変わっていません。むしろ、他の中学校が部活動に力を入れにくい状況からすると本校生徒に際立った清々しさを感じます。変わっていく部分と変わらないところ、教育の面白さであり素晴らしさです。

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『華開くとき』

15日(日) 高校1年生が、近畿インターハイにおいて見事に全国大会への切符をゲットしました。

陸上競技では、京都府で1番になっても全国大会へ出場できるわけではありません。近畿大会で上位入賞しなければならないのです。近畿には大阪府や兵庫県に強豪校が多く、近畿インターハイの壁はなかなか厚いと言われています。特にハードル種目は兵庫県の選手が強く、他府県の選手が全国への切符を得ることが難しいようです。そのようななかで本校の1年生が見事にその切符の1枚を掴み取りました。広島県では思いっきりその力は発揮してきて欲しいです。

ところで、この選手のここまでの道のりは決して順風満帆といえるものではなかったと思います。彼女が中学2年生の時、2枚目の写真と一緒に写っている上級生たちが4×100mRで全国優勝しました。この時、彼女は直前で選外になります。また、中学3年生の時、駅伝でも頑張る彼女はこの時も全国大会で選外となり、後輩の支援に回りました。そんな悔しい思いをグッと胸にしまい込んで練習に精を出してきたのです。

ハードルという特殊な技能を要する種目がそんな彼女を救います。それまでも好成績を残してはいましたが、中学3年生になってからは“京都府では敵なし”という状況でした。写真は今年度の京都インターハイの決勝の様子ですが、この時は数々の上級生の強者を抑えて見事に京都府チャンピオンになりました。「1年生チャンピオンの誕生です！」という場内アナウンスが今も鮮明に耳に残っています。

陸上競技に限らずどんなスポーツでも、いえ勉強でもそうだと思いますが、個人によって伸びる時期には違いがあります。苦しいのはその時期がいつ訪れるか誰にも分からないことです。いつかは分かりませんが、必ず訪れるものです。因みに私の場合、部活動では大学生になってから急に思い通りの試合ができて勝てるようになりましたし、高校2年生の頃に一気に数学が分かるようになりました。それまで苦手だった数学ですが、脳内のシナプスが一気に繋がったように感じ、ただ使っただけの定理や解法の意味や理由が理解できるようになったことを覚えています。そんな「驚きの日」が訪れることを信じてひたすらに練習や勉強を繰り返す以外にありません。

中学生高校生みなさん、焦らずくさらず自分のペースで自分の信じた道を歩み続けましょう。今回全国大会への切符を勝ちとった彼女のように、いつか必ず夢を叶えられる日が来ると信じて努力を続けてほしいです。私たちはその努力を応援します。



女子 100mH	順位	タイム
1 佐藤 楓之海	京都光華	13.79
2 堀江 海陸梨	京都府	13.88
3 内田 西望	京都府	13.99
4 中村 真珠	徳島	14.03
5 木村 悠希	西宮	14.06
6 藤原 千穂	京都府	14.09
7 佐藤 遥子	西宮	14.31
8 佐藤 莉奈	京都府	15.09

京都 IH 100mH 決勝

2025. 6. 11. (WED).

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『念願の舞台へ いざ！』

「インターハイ出場」 これを目標に部活動を頑張っている高校生は全国的にも少なくありません。実は私も高校生の頃はその一人でした。

当時の私も授業のはじまる前から練習し、ボールが見えなくなったらはランニング。大学生になってもその競技を続けましたが、『大学の練習ってなんて楽なんだろう』と思ったものです。

今になって改めて思うのは、『高校生の頃の体かって、ホンマに凄いな』ということです。寝ていて夜中に脚をつるほど疲れていても翌朝には元気になっていたものです。

本校のソフトテニス部の選手たちもインターハイ(全国大会)での活躍を目標に日々の練習に励んでいます。そのために本校に入学してきた人も少なくありません。その子たちにとって、先の土・日曜日は特別な日でした。そう、インターハイの京都府予選大会が行われたのです。7日(土)が個人戦、8日(日)が団体戦です。個人での全国大会出場枠は8ペア。団体では優勝校のみが出場権を獲得します。個人としてはこの8枠を目指して本校の選手同士でも熾烈な争いが行われます。8本取り(勝てばベスト8)では本校選手同士の戦いが少なくないのです。

今年度の団体戦の決勝は、昨年度や一昨年度に比べると幾分か楽に勝てたように思います。もちろん、選手や監督・コーチ陣そして保護者の方にしたら“一世代の大勝負”という気持ちで戦っているのしょうから気が気ではないとは思いますが…。

右上の写真に写っている団体戦メンバーの中で、インターハイ出場経験のあるのは1ペア、2人だけです。しかし、彼女ら全員が今年度は個人戦でも出場権を獲得しました。7日の個人戦の日、準決勝を戦い終えた或る初出場のペアが、その試合を観ていた私の元へアドバイスを求めにきました。一通り技術的戦術的な話をした後で次のように言いました。「個人でのインターハイ出場おめでとう。昨年度のこの大会で悔しい思いをしたのを観ていたので、私も君たちに今年こそは勝って全国の舞台へ行ってほしかった。まずは全国への切符をゲットできて本当によかったな。山口では、“チャレンジャー精神”をもって思いっきり力を発揮してくるんやで。」

二人の目が真っ赤になったと思う間もなく一筋の涙が彼女らの頬を伝いました。

全力を出し切って目標を達成した満足、不安と緊張とから解き放たれた安堵、労いの言葉への喜び、気にかけてもらっていたことへの感謝、様々な感情が入り混じった本当にほんとうに美しい涙でした。

今週末には陸上部の選手達が近畿インターハイに臨みます。陸上競技は近畿大会を勝ち抜かなければ全国大会へはいけません。スキー部の冬の競技も含め、一人でも多くの人インターハイ(全国)という夢の舞台で活躍してくれることを願っています。



表彰式直前のスナップ写真

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『旧友の力』

2003年のことですからもう10年以上前になります。当時勤めていた学校で、文化祭に人権をテーマにした劇を創作し上演するという取組をしていました。その台本にはところどころに空欄があります。その部分は登場人物がその役になったつもりで台詞をつくるのです。生徒たちはそこに“本音”をぶつけ“生の自分”を出して自分自身に向き合います。

そんな取組をしていたところ、どこから聞かれたのかNHKが取材に来てくれ、3か月以上に渡って収録した2本の番組を放送してくれました。その年の12月に放送された「わくわく授業」(NHK教育TV)と、翌年の2月に放送された「にんげんどキュメント」(NHK総合TV)です。前者は全国の興味深い授業を展開している先生の授業を紹介する番組で、後者はこちらも全国で活躍する人物にスポットを当ててつくるドキュメンタリー番組です。結構評判がよく、その後その番組を見たという方々がひっきりなしに当時の学校へ視察に来られました。また、その後は多くの学校や自治体から講演依頼を受けるようになりました。今の私があるのはこのTV出演の影響がとても大きかったと思ったりもします。

その時のディレクターとは、番組作りの打ち合わせをすることから始まって一気に親しくなりました。夜の10時頃から打ち合わせを始め、気づいたら12時近くになっていたということも何度かありました。その人は先生ではないものの、授業づくりの上手な先生を追いかけていたために授業を観る目が肥えており、話していると、授業づくりのヒントがドンドン見つかりました。収録と放映とが終わってからも交友関係は続き、「わくわく授業」の中で取り上げられた他府県の先生方とも繋げてくれました。これをきっかけに私の交友関係は一気に広がりました。因みにその先生方とは、“わくわく授業つながり”ということで今も親交があります。

昨年、その彼が本校を訪ねてきてくれました。普段は東京のNHKにいますが、関西に来ることがあったらしく、本校の校長に就任したということで様子伺いに立ち寄ってくれたのでした。彼は現在も現役プロデューサーとして番組制作に携わる一方で、東京の私立大学で非常勤講師としてICT教育を担当しているとのことでした。

障害があることなどで生きづらさを感じている人たちの番組を制作してきた経験があるため特別支援教育についての造詣が深く、今夏の研修の講師を彼に依頼しました。そんな関係で火曜日の午後、再び本校を訪れてくれました。夕食まで共にし、とても有意義な時間を過ごしました。彼との時間は精力的に教育に取り組んでいた頃を思い出させてくれ、エネルギーを補給させてもらった気分です。旧友の力は凄いものです。



NHK 提供 董事の番組宣伝 DM

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『報われるまで努力する』

25日（日）、初めてトライアスロンの試合を観に行きました。高校1年生が「アジア・トライアスロン・大阪城大会」に出場したのです。正式な大会名は『2025 Asia Triathlon Cup Osaka Castle』で、大阪城公園内でレースが展開されます。当日はオーストラリアやカナダからも来ている大学生や社会人の選手の中で彼女は最年少で出場しました。お堀を泳ぎ、公園内の道路を自転車で周回し、最後はランです。



ランの場面とレース後の記念写真

ちょうど振り出した雨の中でその壮絶な試合は始まりました。ピストルの合図と同時にお堀の中に設けられたスタート・ロープを乗り越えて一斉に選手たちが泳ぎ出します。彼女のお父様と一緒に見ていたのですが、この時点では彼女が何処にいるのか全く分かりません。約700mのスイムを終えてトランジット。自転車に乗り換えます。素早くそれを終えた選手たちはものすごい勢いで自転車をこぎ始めます。実は、この自転車の場面が最も驚きました。物凄いスピードなのです。しかも集団になって走るので、接触して転倒したら大事故・大けがにつながることは必至です。そんな中、懸命に自転車を漕いで走る彼女の姿を私の目も捉えることができました。“いい顔”をしていました。いつもの愛嬌のある笑顔とは違って、サングラス越しのその眼はジッと前を見据え、引き締まったアスリートの顔でした。周回コースを6周走ってまたトランジット。自転車を乗り捨てて最後のランに入ります。実はこのトランジットは「第4の種目」と言われるほどに重要で、これにもたつくとグンと順位を落としてしまうのだそうです。走る姿も颯爽としていました。昨年度の冬には“駅伝ランナー”としてその雄姿を何度も観てきましたが、水着のまま濡れた髪をなびかせて走るその姿からは同じ選手と思えないほどの迫力を感じました。

今回の目標は10位以内に入ることだったようです。残念ながらその目標は達成できなかったですが、それでも出場選手54人中堂々上位に入る活躍でした。彼女の後ろに多くの大学生がいたことを考えると大健闘だったのではないかと思います。

彼女は昨年度の中学3年生時に「アジア・トライアスロン・ジュニア・カップU-15」で優勝してアジア・チャンピオンになりました。その際に京都市が発行する情報誌の取材を受けたのですが、そこでのコメントが強く印象に残っているので紹介します。

好きなことばは「努力すれば報われる」ではなく、「報われるまで努力する」何度も努力が報われなかった経験をした後にこのことばに出会ったそうです。そして、このことばを知ってから努力を継続できるようになったと書かれていました。

わが校の生徒ながら、すごい精神力の生徒がいるものだと思心もし、誇らしい気持ちにもなります。まだ15歳の高校1年生に「生き方」を考えさせられました。

校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『生命力』

もう5年以上も前のことになると思います。可愛らしく咲いている鉢植えのバラを買いました。バラに関する知識がないだけでなく、植物栽培そのものに関心が薄かった当時の私は、花の咲き終えた鉢を玄関からその奥の方に移動したまま放置していました。鉢はしばらく経ってもその葉を枯らすことなくイキイキとした緑色をとどめていました。そこで、水やりだけは続けることにしました。翌年、幾つかの蕾を付けたときには本当にビックリしました。

それから毎年今頃になると幾つもの蕾を付けます。そうってからユー・チューブで「バラの育て方」の動画を観たりするようにもなりました。右の写真の通り今年はとりわけたくさんの蕾を付けました。もっとこまめに剪定すれば更に多くの花を美しく咲かせることができるのですが、なかなかその時間がとれずにいます。

あの鉢のバラは毎年美しい花を咲かせ、家族を楽しませてくれています。ひょっとしたら、今は鉢の底から地面に向けて根が出ているかもしれません。そう思うとバラの、そして植物の強い生命力を感じます。

また、生徒たちの姿からも生命力を感じる場面が少なくありません。多くは部活動や体育の授業の場面です。

Move! のダンス創作やリレーなど、楽しそうに活動し、歓声を上げるその姿を見ているだけでこちらがエネルギーをもらえるくらい生命力を感じます。将に『若いっていいなっ!』と感じさせてくれます。

私の孫のことも紹介します。今月16日に1歳1か月に成りました。その孫が元気に歩き始めています。歩けることがよほど嬉しいのでしょう。パパやママの元まで歩けたときのあの笑顔は今しか見られない宝物です。ハイハイができるようになった、つかまり立ちが…、1歩あるいた2歩あるいた…、日に日に成長していきます。この間までママのおっぱいを飲んでいたあの子が大きなお口を開けて食べ物を要求してもいます。何かをもらったら頭を下げて「ありがとう!」をします。毎日送られてくる動画を観ながらここでも小さな命の強い生命力を感じています。

自分が若い頃には、植物や若者や赤ん坊の生命力になど気付けたのかもかもしれません。これも『年をとるってことなのかな』と想ったりもします。しかし、こういう感性がもてることを嬉しくも思っている今日この頃です。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『非日常を愉しむ』

5月13～14日に中学1年が、14～15日には高校1年が「本山研修」を行いました。

「本山研修」とは、本校の本山である東本願寺の宿泊施設に泊まり、様々な取組を通じて浄土真宗の教えに心を開いて自分の生き方を見つめ直す機会にする行事です。因みに生徒に配布されている冊子の中には次のようにその目的が書かれています。

- ① お釈迦様や親鸞聖人の教えを通して、自己を見つめ直し、これからの中学校生活・高校生活を考える。
- ② 集団生活のルールやコミュニケーション能力を身につけるなかで、同級生と親睦を図り、新しい集団での人間関係形成の一助とする。

「本山研修」という言葉から、なんとなく厳しい修行をイメージしがちですが、実はそんな場面はほとんどなく、生徒たちは楽しい時間を過ごしています。朝の校門で門衛さんと話をしている際、その方は和歌山県のご出身で高野山での宿泊をイメージされたのでしょうか、「宿泊研修での食事のメニューは“精進料理”ですか」と質問されました。私もその様子を観に行くまでは、早朝からの勤行やお堂の掃除など、厳しい“修行”のイメージを持っていましたが、それは誤解であることを知りました。今回も高校生の夕食は生徒たちが好きそうなハンバーグとコロッケがメインディッシュでした。おそらく2日目の昼食もカレーライスではなかったかと思います。一昨年度、その時間帯に観に行った際には高校生たちの中の陸上部とソフトテニス部の子たちがまるで競争するかのよう何杯もお替りをしてカレーライスがなくなってしまった場面を見てもいます。

さて、今年度は中学生では講義を、高校生では座談の場面を観に行きました。講義のテーマは「私にありがとうを言う場面について」でした。生徒たちは、自分の経験をもとに具体的に考えていたようです。講師の先生が冗談を交えながら楽しく話されたので退屈することなく考えられたのではないかと思います。高校生は夕食前の講義で聞いた話をもとにその内容を深め合っていました。講義を聴くことはできなかったのですが、生徒たちの会話の内容から、どうやら「夢」がテーマになっていたようです。生徒たちは「夢」の概念や自分の夢について熱心に考えを交換し合っていました。

学校にいてはなかなか経験できない特別な時間がそこにはありました。普段は会うことのない先生の講義、大人数での食事、グループごとでの話し合い活動、大浴場での入浴、そして大きなお堂での勤行、どれも非日常です。そしてこの非日常はおそらく生徒たちにとっては自分を見つめ直すよい機会になり楽しい時間であっただろうし、そこから学ぶものは少なくなったことだとも思います。よい時間を過ごしました。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『避難訓練から思う』

5月8日（木）の1時間目に避難訓練を行いました。想定は地震の発生です。地震多発国である日本では何年かに一度は大きな地震災害が起こります。まして、花折れ断層が近くにあることを思えば、決して震災は“対岸の火事”、“他人事”ではないことを肝に銘じておかなければなりません。

阪神淡路大震災から30年、東日本大震災から14年が経ちました。当時、妻のお腹の中にいた下の息子はもうすぐ30歳になります。本校にも20歳代の若い教職員がいますが、彼らは阪神淡路大震災以後に生まれたことになるのかと思うと驚きすら覚えます。また、東日本大震災の年に生まれた子どもは既に中学生になっています。時の経つのは本当に早いですが、簡単に忘れてはいけないことはたくさんあります。だからこそ、こういう機会に担任の先生は学活で、親は家庭で震災のことについて子どもたちと話をしてほしいです。

下の息子が住むバンコクで地震があって、建設中のビルが倒壊したのが3月28日でした。ほとんど地震が起らないとされていたタイでは、ビル建設に対する耐震工事が不十分で、あの件で工事の杜撰さも露呈したようです。今、息子の住んでいる高層マンションでは、上層階の住人がこぞって低層階への引っ越しを始め、将に“引っ越しラッシュ”になっているとラインで知りました。「高層階に住みたかったけどそれが叶わなかったことが、今ではラッキーだった。」とも添えられていました。

今年の訓練では、最も集合が遅かったクラスでも3分51秒。教室が4Fにあることを思えばこれは大変優秀な記録です。一昨年、初めてこの避難訓練に参加し、講評を述べた際には「集合完了は5分以内を目指しましょう。」と言ったことを思い出すと立派に目標を達成したことになります。一人ひとりの自覚と行動が全体のものになった証です。よくやりました。小中高生全員が素晴らしいです。

講評で述べたのは次の2つです。6歳から18歳が通う本校においては、あらゆる面で「小さい子優先」にすること。本校が避難場所になった際には、中高生は教職員と一緒に地域の方のお世話をしてほしいこと。児童生徒のあの真剣な眼差しは、内容を理解し、それを素直に受け入れたことを表していたように思います。

GWには各部活動で頑張る生徒の姿を観ました。その時の表情はしんどそうなそれも含めて“キリッ”と引き締まって凛々しくとても素敵でした。一方、避難訓練の時の表情には、試合の時とは違ってしんどそうなそれこそなかったけれど「真剣さ」が見えて気持ちがよかったです。何にでも真剣に取り組める生徒を愛おしくも思います。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『夢』

生徒のみなさんには夢があることだと思います。それは人によって違いがあるものですし、他人の夢をとやかく言うのは間違ってもいます。本校生徒は本当に色々なたくさんの夢（目標）をもって集っています。有名大学に向けて勉強を頑張る人、全国大会出場や優勝を目指して部活動に精を出す人、行事をはじめとした学校生活を大いに楽しもうとしている人、どれも立派な中学生高校生としての夢（目標）です。そして、本校の自慢は、一人ひとりの生徒が互いに仲間の夢を尊重し、それに向かう姿勢に敬意を払い尊敬し、応援し合っているところです。

宝塚歌劇団への入団、そしてあの大ホールの舞台に立つことを夢見て、見事にそれを実現した人がいます。

光華小学校・光華中学校から宝塚音楽学校へ合格し、今や大役を射止める女優に成長されました。宝塚では瑠璃花夏（るりはなか）と名乗っておられます。この方とのご縁で毎年高校2年生が宝塚歌劇の鑑賞に行きます。今年は5月2日に行きました。高校2年生にとっては朝からワクワク気分で、他学年の人たちよりも一日多いGWとなったことでしょう。

本番が始まる前に、今年度初舞台を踏む人たち40名が紹介されました。幕が上がると全員が一糸乱れぬ形で整列し、代表の3人が口上を述べます。毎年その合格発表の様子がTVで取り上げられるほど宝塚音楽学校は“狭き門”です。それを潜り抜け、厳しい稽古と勉強を経ての初舞台です。子どもの頃から歌やクラシックバレエ、ピアノやダンスを習っている人がほとんどです。そんなことに思いを巡らせ、その結果としての凛とした美しい姿に感動を覚えたのは私だけではなかったと思います。瑠璃さんも何年か前にこれを経験されたのでしょうか、本当に素晴らしくも凄い世界で夢を実現されたのだと再認識しました。

GWには多くの部活動の試合やコンサートなどがありました。部活動に頑張る生徒たちはこの大会に向けて精一杯の力を発揮しました。中学ソフトテニス部の個人・団体優勝、中学陸上部の総合優勝など、輝かしい成果を残しました。一方で、この結果の裏側には、試合に出られなかったり負けてしまったりして悔しい思いをした人もいます。夢を追い求め、その実現に向けて頑張る過程で人格が形成されます。努力に無駄なものなどありません。すぐに結果に結びつかなくても必ずいつかその成果は出ます。今後も夢に向かって頑張りを続ける人たちを全力で応援していきます。



公式パンレットより



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『校外学習』

寒い朝になりました。早朝の愛犬の散歩時には『もう袖を通すこともないだろう』と洗濯し、片づけかけていたフリースを着たほどです。

さて、今日は本校の校外学習です。これまで「ハイキング・ウォーキング」という名前を付けて「鍛練的」な要素を取り入れてきました。

その考え方も変化し、「高校生活も最後だから」と高校3年はUSJに行くようになり、BBQを計画するなど、徐々に様変わりを始めています。実は、私はこの時期の校外学習に「鍛練的」という要素を強く求めはしません。むしろ、しっかり楽しんで仲間や先生とのつながりを深めることを目的にしたいと思っています。

かつて、ほとんどの学校で「春の遠足」がありました。この時期にそれがあるのは、季節の変化を感じ自然に触れると共に、新しい学級の仲間との関係を結ぶことが目的でした。そこで、飯盒炊爨（はんごうすいさん）がよく実施されました。竈（かまど）に火をつける、飯盒でごはんを炊く、カレーや野菜炒め、焼きそばなどの料理を作る、上手い出来ないことも含めてその過程で生徒同士の間に絆が生まれます。また、指導する先生との間の関係づくりにも有効だからです。

“授業時間の確保”を主な理由に「春の遠足」が年間行事から消えていきました。集団食中毒の心配や火を使うことから火傷等の事故への不安も声高く言われだし、保護者も教師もナーバスになって一気になくなっていったのです。その時、この行事の意義を十分に理解し、楽しく取り組んできた経験をもつ私たち世代の教師たちは『一体、なんで！？』ととっても残念に感じたことを思い出します。

小中学校で組体操が取り組まれなくなったり、中学校や高等学校の部活動のあり方が変わりつつあったりもします。そんな中であって、私立学校である本校では独自の判断で春の校外学習を継続していますし、部活動にも熱心に取り組んでいます。

普段から授業を多めに組んでいるため、授業時間数に問題はありません。事故に対する不安はなくはないですが、事前にできる限りの備えをしています。

朝の出発時の生徒のあの笑顔に触れたとき、今もこの行事の意義を改めて感じています。学校の一番の目的は学力をつけることですが、学力には二通りあります。数値化できる「認知能力」と“粘り強さ”や“コミュニケーション力”などの数値化できない「非認知能力」です。行事は生徒に後者の学力をつけるのに効果が抜群です。今頃、USJで、六甲山で、京都市内の各所で、そして梅小路公園で、生徒たちは普段の教室の授業では経験できないかけがえのない学習をしているはずです。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『学びは何処にでもある』

今日は「学園花まつり」です。生徒が花を携えて登校するなど、朝から学校全体が華やかなムードになっています。学校の玄関には昨夕、花に飾られたお釈迦様の像が出され、それに誰もが自由に甘茶をかけられるようになっています。

さて、本日の式典に当たって生徒に配られた冊子の中の文章を紹介します。今一度読み返してみてください。

「天上天下唯我独尊」という言葉があります。釈尊（ゴータマ・ブッダ）が誕生した時の第一声として伝えられているものです。釈尊は生まれてすぐに話すほどの天才だった、そんなことを言っているわけではありません。また、「俺がこの世で一番偉い」と威張っていることばでもありません。釈尊が生まれたことによって、はじめて明らかにされたことが「天にも地にも、唯、我、独りにして尊し」といういのちの世界でした。全世界を探してみても、これまでの歴史をたどってみても、私という存在は唯一であって誰とも代わることはできません。決して生まれ変わるものがない、ただ一度の人生を生きているのです、役に立つ・立たないという「ものさし」によって、自分が交換可能な部品であるように思うのは、この唯一性を見失っているからです。また、「独りにして」と言われるのは、はだかのままで尊いということを表しています。学歴、地位、財産、業績などを身にまとうて自分に価値をもたせようとするのは、自分の存在の重さに気づいていないからなのです。誰もが交換不可能な、かけがえのないいのちを生きている。これが釈尊が目覚めたいいのちの世界でした。生まれてこなかった方がよいいのちなど一つもないということ、不要な存在は何一つないこと、それが釈尊が誕生を通して私たちに呼びかけられていることなのです。（中略）生まれや家柄で人にレッテルを貼ったり能力の有無でその人の価値を決めようとしたり、どんな経歴の持ち主かで善人と悪人とに振り分けたり、そんな人間の在り方がどれほどお互いを傷つけあっていくかをよく見ていたのが釈尊でした。それ故に、かけがえのないいのちに目覚めてこそ、お互いに優劣・善悪を争うことからはじめて解放されると呼びかけているのです。誰もが、どんな状況の中でもいきいきと生きていくことができる方法を釈尊は教えてくれています。（後略）

読めば読むほどにその奥深さが伝わってきます。私たちが日々の学校生活の中で大切に生徒たちに伝えたいことは、お釈迦様が既に2500年も前に仰っていたということに改めて気づき、驚きと共に感動を覚えます。今日の「花まつり」に当たって改めて学びを得ることができました。「学び」は色々な所にあるということにも気づかれます。いえ、『学ぼう』という気持ちがあればどこにでもあるかによるのかもしれませんが。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校
澤田 清人

『Goal』を見定めて さあ！』

8日に始業式、9日に入学式を行い、令和7年度が本格的に始まりました。今は『いよいよか。よし、頑張ろう！』という気持ちでいます。おそらく、私以外の教職員も、そして生徒のみなさんも同じような気持ちでいることだと思います。

さて、保護者や関係の皆様方にも知って頂きたい、始業式と入学式で生徒たちと共有した内容を要約して書き留めておきます。私が伝えたのは次の4つです。

一つめは、「一生の宝となる人間関係を築いてほしい」ということです。不登校や引きこもりなど、若者が学校や社会生活に不調をきたす件数が一向に少くなりません。そして、その理由は、ほとんどが人間関係です。人間関係をうまく創ることは、大人になってからも役に立ちます。学校生活はそのトレーニングの場だと思ってください。あなたの周りにいる先生や先輩、友達の力を借りて、一生の宝物となるような人間関係を築いて下さい。

二つめは「確かな学力を身に付けてほしい」ということです。確かな「学力」を身に付けている人は確かな人生を手に入れていることが多いです。自分に合った進路を見つけ、是非とも、それに向けて頭を鍛えるという努力を怠らない人でいてください。

因みに、「学力」には目に見えるものとそうではないものとがあります。点数や進路は目に見える学力ですが、そうでない「学力」は「非認知能力」と言われるもので、「最後までやりぬく力」や「周りの人と協力できる力」などがそれにあたります。特に京都光華では、幼稚園から大学まで一貫してこの「非認知能力」をつけることに力を入れています。京都光華の教育と先生を信じて、確かな「学力」を身に付けてください。

三つめは「ゴールを定めてそれを目指し続けてほしい」ということです。ゴールとは「最終地点」ではありません。実はゴールという言葉にはもう一つ重要な意味があります。それは「目標」という意味です。貴女はどんな目標をもって京都光華へ入学してきましたか。今、貴女の中にある目標、つまり、ゴールを見失うことなく求め続けましょう。先にあげた頭を鍛えることに加え、この過程で心と身体が鍛えられます。

最後の四つめに今年度のキャッチフレーズを共有しておきます。「伝統を重んじつつ、果敢に挑戦する」です。京都光華には素晴らしい伝統がたくさんあります。それに誇りを感じ、大切にしつつ、新しいことに果敢に挑戦して、共に更に素晴らしい学校を創っていきましょう。みなさんと素晴らしいパートナーになれることを願っています。

開校以来の学校大改革のゴールは「京都光華から Well-Being な社会を共創する人材を輩出する」ことです。この大目標に向けて勇気をもってさあ、動き出しましょう。



校長室の窓から

『この子らと共に』 ～ For the students～

京都光華中学校高等学校

澤田 清人

『新たなスタートに向けて』

3月の気温が低かったこともあって、校門の桜が今まさに満開の時期を迎えようとしています。明後日が雨の予報で少々心配ですが、この分なら始業式と翌日の入学式まで美しく咲き続けてくれるのではないかと期待しています。

さて、令和7年度がスタートしようとしています。実は教職員の間では既に始まっています。4月1日が私たち学校に勤める者にとってはお正月に相当する日で、当日の職員朝礼でもそのような話をしました。



校門の桜の木

今、学校では8日の始業式と9日の入学式に向けて着々とその準備を進めているところです。校長の重要な仕事の一つに校内人事を考えることがあります。新しい人事配置については去年の11月頃から考え始めました。その後、何度も検討を繰り返し、修正に修正を加えながら最終的に決定するのです。それが確定した今、新しい組織での会議が始まります。「どのクラスをどの先生が担当するのか」の授業配当をはじめ、学年や学級の経営方針や生徒指導のあり方などについても検討・確認されます。特に今年度は高校の制服が変わったことをはじめとして、来年度の大改革に向けての校則の見直しなどにも時間をかけました。授業のあり方や授業づくりの中で大切にすべきことについても時間をかけて協議・検討します。学校や生徒にとってはとても大事な部活動のあり方など、放課後の過ごし方についても時間を尽くして話し合います。

ザッとあげましたが、これ以外のことについても何日も話し合い、全体で、或いは部会で確認していきます。この過程を疎かにすると一年間が上手く回りません。

ところで、こういった会議をする過程で、教職員の頭には常に生徒の顔が浮かんでいます。一つひとつの話し合いの中で違った生徒の顔が浮かんでくるものです。自分の受け持つ学級に在籍する“あの子”。授業で受け持つ“あの子”。頭に浮かぶその生徒の様子や予想される行動が、教職員が会議の中で意見を言う際の判断材料なのです。

そのような中、私は26年度の大改革に向けて関係各所を訪問し、内容を説明したり助言をもらったりしているのですが、昨日訪れたところで頂いた助言に大きな力をもらいました。改革を実施しようとする際には、どうしてもその具体的な内容に意識が向くものです。「改革の内容が分かりやすいか」、「新入生にとって魅力的なものになっているか」等です。その点に助言を求めたところ、その方は次のように仰いました。

「そんな具体よりも、先生方の“やる気”と“自信”とが見えることが大事だと思います。京都光華には素晴らしい取組がたくさんあります。教職員全員が今やっておられる実践に自信をもって生徒を迎える姿勢こそが大事だと思います。」

大切なことに改めて気が付きました。生徒や保護者の方と一緒に、あらゆることに対して全教職員が自信をもって取り組める一年間になるよう十分に準備を整えます。